新現役ネット　平成十九年一月度講座

武士道の真髄を読む。

【葉隠　精読会】

講師：水野聡（能文社）

第一回　体験講座　1月25日（木）一八：〇〇～一九：三〇

葉隠とは

山本常朝とは

江戸元禄年間の佐賀藩士。万治二年(一六五九)、代々鍋島家忠臣の家、山本神右衛門重澄の末子として生まれる。重澄七十歳の子である。生まれながら病弱で、父親は「塩売りの子にでもくれてやろう」としたが、組頭に留められ松亀と名付けられ育てられた。九歳で藩主光茂付きの小僧として召し出され、名を不携と変える。十三歳で市十と改名、小姓役となる。二十歳で元服、権之丞と改め、御書物役手伝いを勤めた。その後、主君に一時役目を解かれ奉公を離れる。この頃、高名な朱子学者石田一鼎、鍋島菩提寺　高伝寺住持の湛然和尚等と親交を深め薫陶を受ける。二十八歳で再び召し出され、江戸書写物御用、京都詰御書物役を勤めることとなる。

元禄十三年(一七〇〇)、藩主依頼の「古今伝授」を京都から佐賀の光茂へともたらす。が、光茂はこれを拝受した後、十五日で他界。常朝は主君逝去とともに剃髪して出家。以降、金立山黒土原に隠棲する。

十年後の宝永七年、葉隠筆録者、田代陣基の訪問を受ける。その後、約七年間にわたり陣基に、葉隠の原話を語って聞かせ、享保元年(一七一六)頃完成をみる。享保四年、六十一歳にて生涯を終える。戦のない太平の世に、古き鍋島侍の矜持を守り、「葉隠武士道」を身をもって貫いた一生であった。

葉隠とは

葉隠とは

葉隠は、今から約二百九十年前、佐賀藩士山本神右衛門常朝の物語を同藩士田代陣基が筆録・編纂した聞書体裁の佐賀鍋島武士道書である。聞書の内容は、武士として、鍋島藩士としてのあるべき姿、心構えをまず説いたものであり、歴代の藩主、鍋島侍、僧から町人にいたるまで広汎な人々の言行録を膨大な説話として収録したものである。

「武士道というは死ぬことと見つけたり」の句で有名なように、その激烈な論調でとかく異端視、誤解されやすい書物ではあるが、戦もなく太平の世にて戦国侍の気風が失われつつあった当時にあって、これを嘆き正しい奉公人、侍の姿を真摯に追い求めた中世型武士道の聖典とされる歴史的名著である。

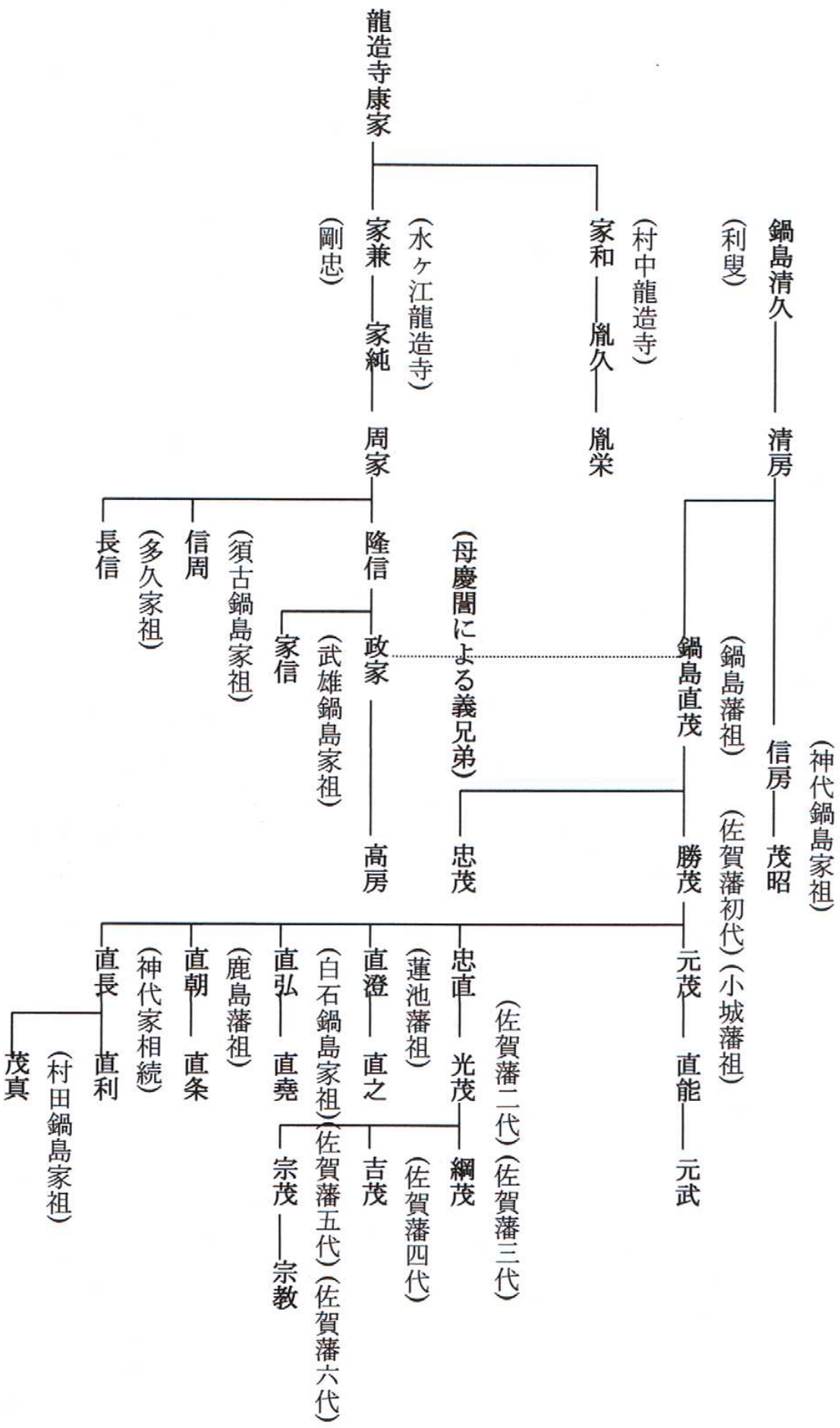
当時の儒学の思想からなる士道とは大きく離れたものであったので藩内でも禁書の扱いをうけたが、徐々に藩士に対する教育の柱として重要視されるようになり、「鍋島論語」とも呼ばれた。明治中期以降、新渡戸稲造によりアメリカ合衆国で出版された英語の書『武士道』が逆輸入紹介され、当時の大和魂など精神主義の風潮が高まると共にもてはやされた。昭和に入ると一種の思想書として軍部に利用された。

葉隠という語源は定かでない。緑豊かな佐賀城を護持する鍋島侍を象徴するという説、木の葉がくれの雑談であり、今でいう縁陰閑話をさすという説、また、西行『山家集』の中にある次の歌がその語流ではないかとする説がある。

「葉隠れに散りとどまれる花のみぞ、しのびし人に逢う心地する」(西行)

「葉隠れに散りとどまれる花」に、中世の真の武士道があり「しのびし人」に耐え忍ぶ本当の葉隠精神があるものとしている。

龍造寺・鍋島家系図


鍋島清久
（利叟）
清房
（神代鍋島家祖）
信房
茂昭
（鍋島藩祖）
（佐賀藩初代）（小城藩祖）
鍋島直茂
勝茂
元茂
直能
元武
（佐賀藩二代）（佐賀藩三代）
忠直
光茂
綱茂
（佐賀藩四代）
（佐賀藩五代）（佐賀藩六代）
（白石鍋島家祖）
直澄
直之
吉茂
（蓮池藩祖）
直弘
直堯
宗茂
宗教
（鹿島藩祖）
直朝
直条
（神代家相続）
直長
直利
（村田鍋島家祖）
茂真
（母慶闇による義兄弟）
忠茂
龍造寺康家
家和
胤久
胤栄
（村中龍造寺）
家兼
家純
（水ヶ江龍造寺）
（剛忠）
周家
隆信
政家
高房
（武雄鍋島家祖）
家信
（須古鍋島家祖）
信周
（多久家祖）
長信

葉隠使用テキスト

原文

葉隠　全三冊（上中下）
山本　常朝、和辻　哲郎・古川　哲史　校訂

■文庫判　■定価　６３０円（本体　６００円＋税５％）
■岩波書店　１９４０年４月１５日

現代語訳

葉隠　現代語全文完訳
山本常朝、田代陣基著　水野聡　訳

■Ａ５版上製　５２６ページ
■定価４４８０円（税込価格４７０４円）
■能文社　２００６年７月１日

武士道といふは、死ぬこととと見つけたり

聞書第一　二

二　武士道といふは、死ぬ事と見付けたり。二つ〳〵の場にて、早く死ぬかたに片付くばかりなり。別に仔細なし。胸すわつて進むなり。圖に當らぬは犬死などといふ事は、上方風の打ち上りたる武道なるべし。二つ〳〵の場にて、圖に當るやうにわかることは、及ばざることなり。我人、生きる方がすきなり。多分すきの方に理が付くべし。若し圖にはづれて生きたらば、腰抜けなり。この境危ふきなり。圖にはづれて死にたらば、犬死氣違なり。恥にはならず。これが武道に丈夫なり。毎朝毎夕、改めては死に〳〵、常住死身になりて居る時は、武道に自由を得、一生越度（おちど）なく、家職を仕果すべきなり。

武士道とは、死ぬこととと見つけたり。生死分かれ目の場に臨んで、さっさと死ぬ方につくばかりのこと。特に仔細などない。胸すわって進むのだ。うまく行かねば犬死、などとは上方風の打ち上がった武道のこと。生か死かの場面で、うまく行くかどうかなどわかるわけもない。人皆生きる方が好きである。

されば、好きな方に理屈をつける。もしうまくいかずに生き残ってしまえば腰抜けだ。この境目が危うい。うまく行かずに死んでしまえば犬死で気違いである。しかれども、恥にはならぬ。これを武道の大丈夫という。毎朝毎夕くり返し何度も死んでみて、常時死に身となって居れば、武道に自由を得、一生落度なく家職も仕果たせるものである。

唯今がその時、その時が唯今なり。

聞書第二　四七

四七　權之丞殿へ咄に、唯今がその時、その時が唯今なり。二つに合點してゐる故、その時の間に合はず。唯今御前へ召し出たされ、「是々の儀を、そこにて云つて見よ。」と仰せつけられ候時、多分迷惑なるべし。二つに合點して居る證據なり。唯今がその時と、一つにして置くといふは、終に御前にてもの申し上ぐる奉公人にてはなけれども、奉公人となるからは、御前にても、家老衆の前にても、公儀の御城にて公方様の御前にても、さつぱりと云つて濟ます様に、寢間の隅にて言ひ習うて置く事なり。萬事かくの如きなり。准じて吟味すべし。槍突く事も、公儀を勤むる事も同然なり。斯様にせり詰めて見れば、日來の油斷、今日の不覺悟、皆知るゝかとなり。

唯今がその時、その時が唯今なり。

権之丞へ話して聞かせた。ただ今がもしもの時で、もしもの時がただ今のことなのだ、と。この二つを別々に考えるゆえ、いざその時に、間に合わなくなる。たとえば、まさに今、御前に召し出され、

「何々の件を今そこで言って見よ」

といわれたとしたら、おそらく当惑することであろう。二つを別々に感じている証拠である。ただ今とその時を分けずに一つにしておくということは、御前で言上する役ではないとしても、奉公人となったからには、御前でも家老衆の前でも、公儀のお城で公方様の御前でも、きっぱりと言ってのけるように、寝間の片隅なりとも毎晩口に出し、習っておくことなのだ。万事かくのごときものなのだ。これに倣い吟味すべし。槍を突く事も、公用の勤めをする事も全く同じ。かように煎じ詰めて考えると、日頃の油断、今日の不覚悟も、皆にわかってしまうものだ、と話した。

聞書第二　四七

葉隠精読　「仁」

仁は人の為になる事なり。我と人とくらべて、人のよき様にするまでなり。

聞書第二　七

七　武士の大括（おほくくり）の次第を申さば、先づ身命を主人に篤と奉るが根元なり。斯くの如くの上は何事をするぞといへば、内には智仁勇を備ふる事なり。三德兼備などと云へば、凡人の及びなき事の様なれども、易きことなり。智は人に談合するばかりなり。量もなき智なり。仁は人の爲になる事なり。我と人とくらべて、人のよき様にするまでなり。勇は齒嚙（はがみ）なり。前後に心付けず、齒嚙して踏み破るまでなり。この上の立ち上りたることは知らぬ事なり。さて、外には風體、口上、手跡なり。これは何れも常住の事なれば、常住の稽古にてなる事なり。大意は閑（しづ）かに強みある様にと心得べし。この分、手に入りたらば、國學を心懸け、その後氣晴しに諸藝能も習ふべし。よく思へば、奉公などは易き事なり。今時、少し御用に立つ人と見れば、外の三箇條迄なり。

葉隠精読　「仁」

仁は人の為になる事なり。我と人とくらべて、人のよき様にするまでなり。

武士の大略を申さば、まず身命を主人に篤と捧げることが根元である。そうした後、何をするかと言えば、内面には智仁勇を備えることだ。三徳兼備などといえば、凡人には及びもつかぬように思えるが、やすきことである。智とは、人に相談するだけのことである。果てもなき智となる。仁とは人のためになること。われと人をくらべて、人の方が良くなるように行うだけでよい。勇とは、歯を食いしばる事だ。後先考えず、歯を食いしばって踏み破るだけのこと。それ以外の立ち上がったことなど知ったことではない。

さて外見では、身なり、話し方、書き方である。これはいずれも日常のことなれば、日頃の稽古で身につくことだ。全体として、静かで力強く見えるように心がけるべし。これらを得た後、国学を勉強し、

聞書第二　七

さらにその後気晴らしにでも芸能を習えばよい。こう考えれば、奉公など易きもの。今、少しでもご用に立っている人を見ると、せいぜい外見の三つができているだけのことなのだから。

水は心安く思ふ故に、溺死する者多し。

聞書第十　四

四　鄭*子産末期に、國家の治め様を問ふ人あり。子産云ふ、「仁政に増す事なし。然れども國家治まるほどに仁政を行ふ事は、ならぬものなり。なまじひにすれば、ゆるがせになりて、しまらぬ事あり。仁*政成りがたくば、きびしく政をするがよし。きびしくといふは、事の出來ぬ以前をきびしくして、悪事の出來ぬ様にする事なり。悪事の出來てよりきびしくするは、わなをかけたるが如し。火は肌を破るものと知るゆゑ、火あやまちをするものはすくなし。水は心安く思ふ故に、溺死する者多し。」と答へられたるよし。

中国の名宰相、鄭の子産の最期に国家の治め方を訊ねた人がいた。子産は

「仁政にまさるものはなし。されど、いったん国家が治まると仁政というものは、なかなか敷きにくい。中途半端にやると、ただ甘くなって、ひきしまらぬものである。仁政が為し難い時は、厳しく政を実施するがよい。厳しくするという意味は、事の起こらぬ前を厳しくし、悪事を未然に防止するということだ。悪事が起きてしまった後を厳しく罰することは、人民にわなを仕掛けることとなる。火に触れると火傷することを知っているから、火による過失は少ない。水はおだやかに見えるので、溺死する者が多い」

と答えたという。

これより見候は、見ぬ分にて候。

聞書第五　十三

一三　右同御慈悲深く御座候故、「御家中下々迄の上に、痛み候事これなき様に。」と、兼々思召し上げられ候。先年堀田玄春御屋分にて罷り下り居り候節、東御屋敷にて月の御詠歌のため御座に御出でなされ、御次には玄春、藤本宗吟、恩田恕情罷り在り候。水ヶ江のあたりに花火あがり候を、玄春見つけ候て、會釋仕り候を聞し召され、御立ちなされ候て、御次へ御出で、玄春へ仰せられ候は、「其方は法度の様子存ぜざる事に候。城下にて火の取扱はきびしき法度にて候。今夜の事必らず沙汰仕るまじく候。外に知れ候へば、科申し附けず候て叶はず候。これより見候は、見ぬ分にて候。」と御意なされ候。玄春感涙を流し、「天下に於て、主君の望み外にこれなく候。則ち御家來に罷り成り候。祿は御了簡次第。」と願ひ奉り候に付て、召し抱へられ候。兼て公儀を望み罷り在り候に付て、最前より召し抱へらるべくと候へども、御斷り申し上げ候故、先づ御屋分にて罷り下り居り候時の事にて候由。右同

これより見候は、見ぬ分にて候。

慈悲深い人柄であった。

「家中の者下々にいたるまで、苦しまぬように」

と常々願っていたという。

さる年、お雇いの身分にて堀田玄春という者が国元に滞在していた。月を読む歌会、との趣向で光茂公が、東屋敷へと運ぶ。次の間には、玄春、藤本宗吟、恩田恕情らが列席していた。水ヶ江の方角に花火が上がったので、玄春は皆に伝えた。これを聞いた公は立って次の間へ入ってくる。玄春へ、

「その方禁令のことを存ぜぬ。ご城下において火の取り扱いは重い法度となっている。今夜のことは絶対人にいってはならぬ。外に知れてしまえば、罰せずにすむものではない。今この時から、花火を見たことは、忘れてくれ」

と注意した。玄春は感涙を流し、

聞書第五　十三

「天下広しといえども、それがしが仕えたい主君は、光茂公をおいて他にはありませぬ。ご家来の端にお加えください。禄などはご料簡次第」

と願い出、召し抱えとなった。この者は前々より公儀への仕官を望んでいたので、光茂公は随身の希望を持っていたが、当人がご辞退していたのだ。さらばひとまず雇いの身分で、ということで国元に下って来ていた時のことだ。

葉隠精読　各回予定

今後の「葉隠精読会」は、各回テーマにそって開講していく予定です。現代日本で失われつつある、しかし現代日本人にとって、今もっとも必要と思われる、キーワードを選定しました。

●各回予定テーマ

第一回「恥」　6話
第二回「恩」　6話
第三回「忠節」　9話
第四回「主従」　11話
※前編、後編に分けても可。
第五回「家族」　6話
第六回「ユーモア」　9話
第七回「僧侶」　4話
第八回「女」　9話
第九回「義」　5話
第十回「死」　4話
第十一回「勇気」　4話
第十二回「機知」　7話
第十三回「心得」　8話
第十四回「信念」　7話
第十五回「曲者」　3話
第十六回「慈悲」　5話

※以降は、「聞書一」より順に任意章段を読解予定。

【言の葉庵】ホームページ
http://nobunsha.jp/

いにしえの偉人、達人の知恵と言の葉のエッセンスを、古典の名言、名文から汲み取り、分かち合うためのページです。日本精神文化を代表する能、茶道、武士道、俳諧、禅などの古典名著から毎回、名言・名句をピックアップし、解説とともにおすすめ作品の本文を現代語訳にて抜粋、ご紹介していきます。

現代語訳　風姿花伝

著者：世阿弥著　水野聡訳
本体価格：950円(税抜)
出版社:PHP

能の大成者世阿弥が亡父観阿弥の遺訓を基に著した、日本最古の能楽理論書である。日本人にとっての美を深く探求。

強く生きる極意　五輪書

著者：宮本武蔵著水野聡訳
本体価格：950円(税抜)
出版社:PHP

宮本武蔵の代表的著作。自身、二天一流の兵法を書き表した剣術兵法の伝書である。地・水・火・風・空の全五巻より成る。

葉隠　現代語全文完訳
著者：山本常朝著　水野聡訳
本体価格：4,480円(税抜)
出版社:能文社

「武士道というは死ぬことと見つけたり」。佐賀鍋島藩士が聞書・筆録した江戸元禄期、武士道の聖典。

南方録　現代語全文完訳
著者：南坊宗啓著水野聡訳
本体価格：3,300円(税抜)

出版社:能文社

千利休の茶法を伝える秘伝書。古来数多い茶書の中でも、最も重要視されてきた茶道の聖典とよばれる名著。

山上宗二記　現代語全文完訳
山上宗二著　水野聡訳
本体価格：2,300円(税抜)
出版社:能文社

村田珠光より千利休にいたる茶道の秘伝書。茶道の正統、珠光流茶道の歴史的解説書とその集大成。

次回発行予定作品

★2007年3月頃発行予定

奥の細道　現代語全文完訳
松尾芭蕉著　水野聡訳
芭蕉の俳諧紀行文最高傑作。

★2007年末頃発行予定

貞観政要　全和文完訳
水野聡訳
中国唐代「帝王学」の世界的名著。